

1283

19
96

大内青齋先生序
池田良吉著述

天理教處分論

東京

護法書院發行

序

天理人欲之辨。吾惑之也久矣。飢思食。壯思色。

謂猶火之熱。水之冷。似不要辨者。然欲食而盜。

欲色而姦。尚可附不問乎。自古曲解人欲。以為

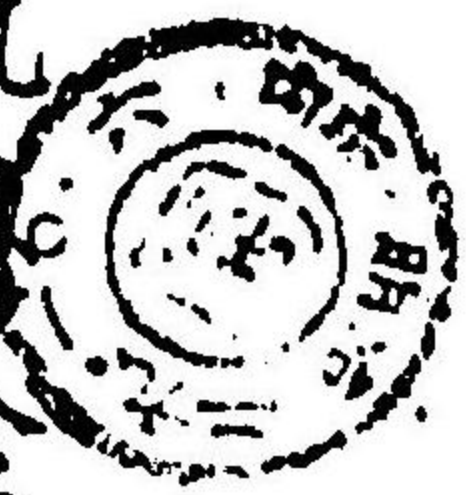
天理者有焉。然專勸人欲。而名天理之教者。未

嘗聞有之也。而有之實始于妖婦中山某。某所

勸。其盜則吾未聞之。其姦則往々有之云。池田

君良吉。痛歎其害世道人心之甚。頃者著一書。

排斥無遺。天理人欲之辨殆盡。題曰天理教處



分論。刻成。囑序。乃書之。應之。爾。丙申中秋。

藹々居士撰于城南麻谷露堂々處

天理教處分論目錄

- 第一 維新以來の新宗教
- 第二 天理教は秘密教なり
- 第三 天理教は預言教なり
- 第四 天理教は通俗教なり
- 第五 天理教は排撃すべからざるか
- 第六 天理教に付ての五調査
- 第七 天理教の二質問
- 第八 天理教排撃すべし
- 第九 天理教を排撃する方法

天理教處分論

能登 池田良吉著述

第一 維新以來の新宗教

維新中興以來、日本社會の局面全く一變し、有形無形の事物變化を見ざるはなし、而して無形界の一大勢力たる宗教に至りては殊に甚し、外來の基督教が神道佛教と鼎立して三國魏吳蜀の勢を現出とたるは敢て裏手に足らずと雖も、天理教と云ふ佛教にあら

ず神道にもあらず基督教にもあらざる一種の新宗教が、僅々數十年の間に萌芽を發し、枝葉を長し、蔚々蒼々たる怪幹妖枝、其下數十百萬の信徒を庇蔭す

るに至りては、眞に是れ不可思議の現象、苟も世道人心に志とあるものは之が討究を怠らざるべし、凡そ新宗教の世に起るや、歐米各國に在りては世間
有識の士、眼光を此に注ぎ、熱心に之が現象を討究せざるはなし、例へば彼の米國に於けるモルモン宗の如き、基督教の一派たるに相違なると雖も、其
夫多妻を主張するに至りては、實に是れ一派の新宗教を建設したるものに相違なし、又印度に於けるブラマソマジダ宗の如きは、波羅門教と基督教とを折衷したるものなりと雖も、既に兩教を折衷したる以上は、是れ純然たる基督教に非ず又純然たる波羅門

教に非きして一種の新宗教たり、故に歐米各國の士女の皆熱心に兩教が國家上、社會上、人心上に於けるの結果を討究せざるはなし、今や天理教の我邦に起る、亦豈討究の價值なしとせんや、天理教の教祖たるものは果して何人ぞ、弘法傳教の流か、法然親鸞の亞か、榮西日蓮の儔か、曰く否々然らず、不學無識の一老婆のみ、天理教の信條なるものは果して何者ぞ、有神教か、無神教か、萬有神教か、靈魂の滅か不滅か、未來世界は存在するか存在せざるか、曰く是等世界觀、人間觀に關係ある問題に至りては一定の教承あるを聞かず、之を神道と

すれハ報本返始の義なく、之を佛教とすれハ出離解脱の理なし、然らハ天理教は何の地に起りて何の地に行はるゝか、曰く其生起したるの地の則ち大和僻隅の地のみ、而して其教會ハ今や既に全國に蔓延して殆ど『天理王の命』の聲を聞かざる所なきに至れり、蓋亦盛なりと謂ふべし、

抑も天理教の教祖即ち彼等信徒が尊稱して『天理王の命』とする所のものは、奈良縣大和國山邊郡三味田村前川氏の女にして其俗名をオミキと云ふ、天保九年彼の年齢正さに四十歳なり、明治廿年八十九歳の高齡を以て此世を去れり、即ち教祖の死は今を距る僅

に九年の前に在り、而して今日大和の國教祖の誕生地に於ける天理教會本部の會長と名て教正の任に在るものは教祖オミキの孫中山新次郎氏是れなり、嗚呼今日天理教の名稱ハ既に海内に呼號せられざるハなし、而して教祖オミキの死ハ僅か九年前にありとことハ恐く之を知るもの極めて稀れなるべし、又教祖の孫中山新次郎氏が現に會長となりて本部にあるおども、亦恐く之を知るもの極めて稀れなるべし、

第二 天理教は秘密教なり

世の天理教を論ずるもの大抵自家撞着の論理に陥らざるはなし、其言に曰く、眞理は勢力を有す、而して

て天理教の害は關邪せざる可らずと、嗚呼眞理にて
 て勢力を得るものならしめは、非眞理は勿論勢力を
 得ざるべし、天理教に於て非眞理ならしめは其害は
 畏るゝに足らざるべく、又之を關邪するに及ばざる
 べし、何となれば其勢力を社會人心に得ざるを以て
 なり、

然るに天理教が近十年來、社會人心に得たるの勢力
 は眞に畏るべきものあり、是れ他の宗教家が力を極
 めて之が排撃に従事する所以なり、然るに之を排撃
 する愈々熾んじて、天理教信徒の信仰と團結とは
 反て益々強固を加ふるの觀なきに非ず、是れ果して

何如なる理由なるぞ、蓋し其排撃たるや、表面皮相
 の排撃にして、深く其肯綮に中り、以て天理教信徒
 の心を服するに足らざるが故のみ、何を以てか之を
 言ふ、蓋し天理教には、實に門外漢が窺ひ知らざる
 の妙味眞髓を有す、而して天理教を排撃するの口實
 を聞くに、曰く天理教の教祖オミキ婆は不學無識の
 産婆のみ、曰く天理教の布教手段は詐偽瞞着のみ、
 曰く天理教の教會所は猥褻と姦婦とを以て満された
 るの待合のみ、曰く何、曰く何、皆是れ表面にあら
 ざるはなし、皮相にあらざるはなし、如何人を能く
 天理教徒を心服することを得んや、蓋し天理教徒は

鰻を喰ふて其美味を知るものなり、而して世人鰻の蛇に類するを以て蛇を喰ふを以て之を排撃す、果して天理教徒をして心服せしむることを得るや否や、天理教の妙味真髓は、其秘密教たるにあり、大古埃及の宗教は嘗て秘密教なりと、表面蟲魚草木を拜跪るて、裡面幽玄の理を説く、婆羅門教は秘密教なり、佛教にも顯密二教あり、基督教も亦スウエデンホルクに至りて秘密教となれり、抑も凡ての秘密教は必ず顯密二面を説く、天理教も亦顯密二面あり、即ち天理教は、顯面に於ては日本國初の諸神を以て世人が想像するが如く説くと雖も、密面に於ては是等の

神々を以て紗虎蟒龍等動物の表現とし、而して是等動物は永遠存在し、活動し、變化する真理の表現とす、於是乎、單純にして潔白なる諸神は、或は翼を有し、角を有し、鱗を有し、爪牙を有する異形の怪物となりて玄妙不可思議の勢力を有して人間の命運を左右す、然れども是等の教理は所謂秘密の教なるを以て受職灌頂眞言宗の儀式と異なるも世人をして解し易からしめんが爲めに之を借用す以上のものにあらずれば奥義を興り聞くを得ざるなり、

天理教の本尊とする所は十柱の神なり、十柱の神とは第一國常立尊、第二面足尊、第三國挾槌尊、第四

月讀尊、第五雲夜見尊、第六惶根尊、第七大戸邊尊、
 第八帝釋天尊、第九伊邪那岐尊、第十伊邪那美尊、
 是なり、而して教祖ヲミキを稱して天理王命と稱す
 るものは、天柱を立て地維を維し、以て顯幽二界を
 攝理する以上十柱の神の總代として道を宣べ世を濟
 はんが爲めに此世に降世とたるを以てなり、即ち教
 祖天理王の命は人間に現れたりと雖も、其實十柱の
 神の權化なりと謂ふべし、猶ほ佛教にて釋尊が佛陀
 の應身たり、基督教にて基督が獨一眞神の化身たる
 が如し、而して吾輩の獨り異む所のものは十柱の神
 に就て其九神は皆日本の國神たるも、但帝釋天尊の

一神に至りては是れ印度の神にして日本の神にあら
 ざることは是れなり、帝釋尊天とは即ち梵天ブラマの
 事にして、印度諸天の最高貴、最權力あるものなり、
 今や天理教此の一神を取りて以て所奉の神とす、是
 れ其純然たる神道に非ざる所以あり、純然たる神道
 なれば其所奉の神は日本の國神に限らざるべからず、
 而して其必ず印度婆羅門教の天を以て所奉の神とす
 るものは、天理教か純然たる神道に非ざるを知るべ
 し、天理教既に純然たる神道にあらざるとするも、
 亦固より純然たる婆羅門教にもあらざるなり、但天
 理教が世界の三大禍害、即ち形而上禍害(無常有満例

へは人間感覺、思想、生命の有限にして無限ならざるが如き)道德的禍害(一切の罪惡物質的禍害(一切の疾病)を以て其根元一に歸するが如きは、婆羅門教の神髓を得たるものあり、

且つ夫れ十柱の神の中に月夜見、雲夜見の二尊あるものは即ち以て天理教が顯幽二界を該攝するの廣大なるを知るべし、月夜見尊の司轄する所は是れ幽界中の幽にして、雲夜見尊の司轄する所は是れ顯界中の幽なり、顯中有幽とは晝間猶ほ暗さ處あるが如く、幽中有幽あるとは夜間の眞に暗さが如きのみ、然らば則ち、天理教の世界を説くや、三千世界亦皆網羅

すと謂ふべきなり、

天理教第二の秘密は神人の交通にあり、其一滴の水を以て萬病を治すると云ふも、實は秘密の奧義を示めず、其オ○ヌ○ク○モリ○と唱へて男女深夜密室に會合するが如き、世人は偏に猥褻の意義に取れども、其の實神靈の來降感格を待たんが爲めなり、而して天理教會の全國に多きや、或は之によりて姦婦私通の媒介を爲す無とは保せず、然れども熱心なる天理教信徒がオ○ヌ○リ○モリ○を爲すや、凝然靜坐、寂然感通、其樂みや言ふ可らず、其味や語る可からず、又猶ほ佛教僧侶が參禪入定するが如きのみ、試みに天理教

が奥義の經典を執りて之を讀め、其天神五代地神七代等の性徳を説く、恰も真言宗が三十七尊の性徳を説くが如く、其諸神の形狀を説く、恰も使徒約翰ヨハネの黙示録を讀むが如く、而して天理教の理想は、又一層幽玄、一層深奥、一層不可思議なるを見る、之を要するに感覺の及ばざる所、道理の及ばざる所、獨り想像の通ずるあるのみ、而して此想像たる、不可思議の伴ふあれば、愈々其幽玄と深奥とを増す、而して天理教徒の既に其堂奥に入るものは、是等の秘密莊嚴界に逍遙して天地を狭とし、萬物を小なりとす、是れ皮相攻撃の彈丸、豈に能く達する所ならん

や、

第三 天理教は預言教なり

凡そ宗教にして預言的の要素を有せざるものなし、預言なきの宗教は宗教とするに足らず、基督教の預言教たることは論ずるまでもなし、佛教の如きも亦預言教なり、請ふ見よ釋尊は預言に應じて生れたるにあらずや、釋尊は預言者として生れたるにあらずや、而して佛教は猶ほ將來に彌勒菩薩と云ふ預言者の出現を有するにあらずや、天理教も亦然り、大和僻村の一産婆は預言に應じて生れたり、預言者として生れたり、其言に曰く、天

理王の命(即ち一産婆)の此世界に出現するは、世界創造の初めより既に定まれり、而して天理王の命は果して其運に應じ人間となりて生れたり、世界に二大時期あり、其天理王の命未現以前を以て前期とし、既現以後を以て後期とす、而して天理王の命の出現するや、人類の潮流を一變するに在り、肉體精神既に腐敗するの人類を本來の健康に復するは、是れ天理王の命出現の目的なりとす、
又言ふ、天理王の命は一度世界に出現して其形を隠すと雖も、今猶ほ天上に在りて宇宙人類の攝理をなすとつゝあり、天理王の命は博く人類を愛し、特に教

會信徒を愛す、而して天理教徒が天理王の命を慕ふ、赤子の慈母に於けるが如し、此他天理王の命が世を去るや數條の遺訓を垂れり、而して其書猶ほ傳ふと雖ども、是れ吾人門外漢の敢て知らざる所なれば姑く之を不談に附するのみ、天理教徒の言ふ所に従へば、教祖オミキも四十歳に達せざる間は人の妻ともなり、子をも設け、別に普通の人と異なることなし、若し異なるとせば其天性聰慧にして慈善の心に富みたること是れなり、然るに教祖の年四十に達するや、十柱の神忽ちに其身體に乗り入りて其言語舉動始めて別人となれり、然らば天理教は是れ神より默示せ

られたるの宗教にして、人間が理論を推して建設したるの宗教にあらざる亦甚だ明瞭ならずや、昔者猶太の預言者等皆此の如くして預言者の職を撰はれり、教祖オミキも亦學問を積み、理論を推して、自家獨得の見を開きたるものにあらざるは亦皆萬人の共に認むる所なるべし、然れども其言ふ所は往々にして天理人道に合し、世間大學者の議論と雖も亦及はざる所あり、是れ亦天理教が預言教たるの明證に非ずや、

第四 天理教は通俗教なり

何をか天理教を稱して通俗教なりと云ふや、其經典は假名を以て綴りたる和讃様のものゝ外、別に解し難きものなし、其禮拜式は俗踊のみ、其信仰は單純のみ、其道德は普通のみ、其僧侶の俗服を着し俗事を務むるの俗人のみ、天理教も我が宗教は陽氣なる宗教なりと自ら云へり、陽氣には即ち樂世の義ならずや、

然り而して天理教の社會に蔓延するの源因は此に在り、蓋し人心智識上の階級懸隔する、未だ今日の如く甚しきものはあらず、淨土宗眞宗の如き、本と易行の法にして愚俗に通するの宗教なりしが、今や務めて智識の進歩に伴はんと欲して、其弊たるや漸く

教會の下層なる階級と相懸隔するに至らんとす、此時に方りて天理教起りて通俗の教旨を唱ふ、下層社會の多數豈に之を歓迎せざるを得んや、社會の智識は如何に進歩するも、教育は如何に普及するも、理想は如何に發達するも、社會の多數は失敬乍ら猶ほ愚俗なりと謂はざるを得ず、而して宗教は恒に如何にして此愚俗を濟度するかを忘却す可らず、試みに社會智識の高級に位する博士の論文、大學の講義、千冊の書冊を讀め、何んぞ夫れ高尚なるや、又試みに社會智識の次級より發表する新聞雜誌及政事家紳士の談話を讀み、又之を聞けよ、高級に

比すれば頗る卑近なり、次に社會の下級に適應する芝居、軍談、講釋の類を聞け、又次級と同一の談に非ず、而して是れさいも猶ほ理會するの能力なきもの多きにあらずや、今や是等の人に向つて宗教を及ぼさんとすまば、固より卑近にあらざれば不可なり、固より單純にあらざれば不可なり、且つ夫れ世人は智識の進歩、教育の普及、理想の發達を以て社會全體の智識思想も亦愈々高尚に赴くもの、如くに想像すと雖も、其實社會の傾向は、其進歩に伴ふて愈々生活の困難勞力の増加を生じ、教育學問の恩波に浴せざるもの反て

多かふんとす、故に世の宗教が社會の上級に適合せんと欲して、次第に高尚なると同時に、其下級に於けるの適合は之を失はんとす、是時に方りて下級に適合するの宗教一朝勃興するとき、社會の多數は沛然相率ひて之に歸せん、而して天理教の今日に起る、亦其故なしとせざるなり、之を要するに天理教は其教理の系統、其教會の組織不完全たるにもせよ、確かに三個の性格を具へたり、曰く秘密的、曰く預言的、曰く通俗的是れなり、而して秘密的は宗教の根本に於て如何なる勢力を有するか、預言的は宗教の活動に於て如何なる勢力を有

するか、通俗的は宗教の傳播に於て如何なる勢力を有するか、世人は宗教史に就て善く討究するものは敢て今日天理教が盛大を致す所以に驚かざるべきのみ、吾輩は更み一事の以て此に附して論ずるあらんとするなり、昔日基督教の始めて羅馬に入るや、其識者は擧げて皆基督教の淺薄なるを輕蔑し、特にマ^ルカス、^アウレリウス帝の如きは、仁徳賢明の君主、而かも大哲學者たるの識見を有するの人なりしが、深く基督教の妄誕不經を惡みて自然の大道を唱へ、全力を尽して基督教を防禦せんと企てたり、今や^マルカス、^アウレリウス帝の著はせる道德書を讀むに、

其意旨の深遠にして高尚なる、其理義の公平にして正大なる、恰も支那の聖人儒教の經典孔子の論語を讀むの心地せり、而してマルカス、アウレリユスの道德教、遂に基督教の爲めに敗北を執りたるものは、基督教も通俗的にして能く社會多數の人民を感化するの勢力あるを以てなり、今日天理教の通俗的の性質に於ては佛教にも亦基督教にも卓絶するの點あり、然らば則ち天理教が益々以て勢力を將來に得る、亦以て知るべきのみ、

第五 天理教は排撃すべからざるか

以上の如く論じ來れば、天理教の盛大なる所以も畢竟盛大なる所以の理由ありて存在すれば天理教を排撃するは不可なるか、曰く何んぞ夫れ然らん、苟も天理教として排撃すべきの點あればトシ、之を排撃すべし、何んぞ猶豫すべけんや、只だ吾輩の願ふ所は無効の排撃にあらずして有効の排撃に在り、然れども天理教にして世道人心に害なからんには、強て之を排撃するの必要もあらざるべし、而して天理教が世道人心を害するの點は果して焉くにあるか、先づ之を討究せざる可らず、

近日に至りて世人が天理教を排撃するの聲は囂々として四方に起れり、而して天理教は一言以て之が惑

を解きたるを聞かず、是れ蓋し世人が之を排撃する
 専らを姦猥の點を責めて其他に及ばざるが爲めか、
 昔者は羅馬帝國に基督教の始めて進入するや、其信
 徒深夜密室に男女混雜會合したるを以て基督教の姦
 猥の媒介をなすとの譏を受けたり、今日の天理教之
 に類せざらんや、又天理教の踊を見て卑俗なりとす
 るものあれども、往時念佛諸宗の鎌倉足利に勃興す
 るや、歌念佛あり、念佛踊あり、意ふに今日の天理
 教と大差なからんのみ、而して僅に是等の點のみを
 以て天理教を排撃するは皮相の見のみ、
 基督教が始めて羅馬帝國に入るや、其教徒は男女相

混じ、密室の中に夜集曉散するを以て、當時の人皆
 曰く、基督教は男女の密會を媒介する姦猥の教あり
 と、基督教は之が爲めに一時大に其傳播の進歩を遮
 けられたることあり、然れ共顧みて當時羅馬全都の
 有様を見るに、春宵一刻の夜宴に煌々として天上の
 星の如く金銀や金剛石を簇めたる綺羅の衣を被たる
 才子佳人相携へて酔飽歌舞して長夜を明かち、或は
 浴場に至れば數千の浴客の大理石を以て穹圓形に築
 き立てられたる廣大の浴池に相戯むれ、其四方の壁
 は精妙形容と難きの春畫を掲げ以て男女の春情を
 催ふせしめ、狂蝶花間相逐ふの状態に至りては、

直ちに是れ快樂の天國にして、而かも人類の墮落地獄なり、今や我國道德の腐敗決して羅馬帝國の如く其れ甚からずと雖も、貴顯上流の紳士、公然藝妓娼妓を以て其令閨とし、意氣揚々相携へて馬車に乗り愧を知らずと雖も是れ亦た駸々乎として羅馬帝國の狀態に入らんとするものなるを、而して獨り天理教を誇りて姦猥とするに至りては、吾輩其何の謂たるを知らざること能はざるあり、

吾輩も亦天理教の排撃せざる可からざるを知れり、而して之を排撃するの前に方りて將さに五調査、二質問の議を提出せんとす、果して此五調査、二質問

にして實施さらるゝの日ハ、即ち是れ天理教が性體呈露するの日なり、

第六 天理教に就ての五調査

吾輩ハ天理教に就て調査すべきもの五件なるものハ、第一天理教の奥義書、第二オミキ教祖の素性、第三信徒増殖の統計、第四布教の手段方法、第五天理教内に信せざらるゝ各種の奇跡是れなり、
 第一天理教の奥義書なるものは即ち其教祖オミキによりて錄せられたるものなり、天理教徒の録々たるもの之を奉じて金科玉條となす、而して彼れとても固より之を窺ふを得ず、然れども天理教の附屬する

神道本部をとて之を取調ぶるの必要ありとせば、天理教の何時にても其命を奉せざるを得ざるべし、是れ先づ調査すべきの要件たり、此奥義書にて一たび世上に顯われなは、五里霧中にありて人をとて其性體を怪まらむるの天理教の忽ち判断せらるゝに至るべし、

第二教祖オミキの素性を明しするの天理教を判断するの要件たり、凡そ一宗の宗祖たるもの、佛敎と神道とを論せず、皆明瞭ならざるべからず、而して獨り天理敎の教祖オミキの素性に至りては之を明にするものなり、或は曰くオミキ婆は嘗て結婚したるこ

となき童貞なり、或は曰くオミキ婆は一度人に嫁したるも穢事を厭ふて離縁せりと、或は曰くオミキ婆は山伏と姦通したるの女なり、或は曰く田舎三百代言の妻たりしなり、或は曰く其産みたる子なり、或は曰く今日大和本部の教主たるもの、其子あり、或は曰く非常に多姪にて少年男子を愛したるの女あり、或は曰くオミキ婆の朋眸皓齒絶世の美人たりとなり、或は曰く非常の醜婦にして無鹽三舍を避くと、傳説の紛々として一ならざるや此の如し、吾輩將た何れを取り何れを捨てんや、

或人の言ふ所によればオミキ婆は生來人に異なるの

天性を有と、往々山間無人の地にありて静坐黙禱せ
 とことありと、或は曰くオミキ婆ハ元來普通の田舎
 女なりとも、中年以後一旦狂を病み、是れより生前
 の事を語り、未來の事を談じ、人の禍福、事の成否
 を預言する百發百中なりと、或は曰く、オミキ婆
 が福音を傳へて多くの信徒を集むるや、市井の無賴
 之を嫉み、オミキ婆も信徒稠人の中に罵りて醜詆を
 極め、殆ど堪ゆべきにあらざるに、オミキ婆は夷然
 として毫も怒らず、無賴漢其坐を去りと後にて、其
 徒に謂つて曰く、吾れ彼が暴を惡まずとて却て彼が
 狂を憐むなりと、或は曰く、オミキ婆は多才多智、

萬事に如才なき女なりと、是れ亦傳聞にして果し
 て信なりや否や、
 吾輩がオミキ婆に就て調査せんと欲する要件は左の
 如し、

甲オミキ婆の家族は如何なる職業ありとや、其
 家の貧富如何なりとや、又家族に一種宗教上
 の傳説及教育ありとや否や、

乙オミキ婆は果して一生未通女なりとや、將た
 人の妻たりとや、若し人の妻たりしならば何
 如なる事情ありて離婚せとや、若し離婚せざ
 りしならば、其夫との交際は如何なりとや、

丙オミキ婆は如何に多くの文字を讀み得たるや
否や、又神道佛教若くは基督教の説教を聽聞
したることあるや否や、又宗教上の書籍を讀
たることあるや否や、

丁オミキ婆が始めて天理教を唱道せしは何如な
る事情に起りしや、何如なる機會に乗せしや、
又始めて其信徒となりて隨喜渴仰せしものは
何人なるや、オミキ婆の親戚縁故の人なりし
や、又は本來無縁の人なりしや、又有教育の
人なりしや、無教育の人なりしや、又オミキ
婆の行に感服したるや、將た其説に感服した

るや、

戊オミキ婆は何年間傳道せしや、何の地に巡教
せしや、其終始傍に在ありて到處隨行せし信
徒は、今日尙生存するや否や、又傳道巡教の
際何如なる境遇に遭逢せしや、又何如なる人
物と何如なる問題に就て談論せしや、

己オミキ婆が傳道を始めし以後は其以前に如何
なる相違ありしか、生活上一種特別の徴あり
とか、即ち起臥飲食游戲交際嗜好等は普通の
人と何如なる相違ありとか、又オミキ婆の身
體は健康なりしや、若くは健康ならずとせば如

何なる病氣を有せしや、

第三信徒増殖の統計に就て調査の要件たるものは、
第一オミキ婆出現以來今日に至るまで幾年間信徒が
増殖せし數、第二天理教傳播の全國に於ける地方信
徒多少の比較、第三天理教信徒を職業犯罪男女老若
等より比較するの統計、蓋し是等の調査を精密にな
すときは、天理教感化の性質及効果を明にするを得
べきなり、

第四布教の手段方法に就て先づ首として調査すべき
ものは天理教の教師なるもの、教育經歷及職業是れ
なり、若し果して世人が言ふ所の如く天理教の教師

をどて果として三百代言の徒をして其過半を占めしめ
は如何、又待合の主人をして其多數を占めしめは如
何、之を要するに布教の手段方法を知らんと欲せば
其教師の人物を詳にするに如くはなと、先づ教師の
人物即ち其教育及經歷職業を詳にして其布教の手段
方法に關する世上粉々の傳説臆測も亦其眞偽を判断
べきなり、

第五天理教内に於ては、今古の新宗教の如く教祖及
教育に關するの奇跡談も亦尠らず、而して是等奇跡
の性質及目的を討究するは、亦天理教を知るに於て
尤も缺くべからざるなり、

凡そ以上の五調査は皆公平無私の精神を以て之に従事せざるべからず、然らざれば調査の益なく、天理教の真相を明にするに足らざるなり、蓋し第一第二の調査は宗教學に必要なべく、第三第四の調査は社會學に必要なべく、第五の調査は井上博士が妖怪學の好材料たるべし、

第七 天理教の二質問

吾輩が天理教に向て質問せんと欲する所の者は、第一天理教は何故に神道に附屬して其一派なるや、第二天理教は何故に一宗を唱道するの必要あるや是れなり、

第一の質問は天理教に向て何故に神道に屬するの必要あるや、又神道本部に向て何故に天理教を其一派と見做すやを問はんと欲するに在り、天理教にして果して神道の一派たらば、自ら其神道たるの實を示さざるべからず、又神道にして天理教を以て其一派なりとせば、其神道たるの實を天理教に向て責めざるべからず、而して今や天理教は神道各派を一貫するの大義、即ち報本返始の大義なし、神道たるの實果して焉くにあるや、若し神道本部にして天理教を以て神道たるの實なしとせば、神道本部は斷然天理教を其所管外に斥逐せざるべからず、

吾輩獨り怪む、世の天理教を排撃するもの神道本部を責めずとて天理教を責む、今日に在て天理教は、獨立の宗教にあらずとて神道の一派なり、苟も天理教を排撃せし、馮ん予進んで神道管長の責任を問はざるを得んや、又怪む、世人が驚々として天理教を排撃するにも係らず、神道が冷然傍觀と、恬然介意せざるものは是れ獨り何如なる故乎、神道既に天理教を以て其一派とす、天理教の失體は即ち是れ神道の失體にあらずや、神道果して天理教の失體を以て自己の失體とせば、天理教の排撃せらるゝを坐視傍觀するの理あらんや、

之を要するに天理教は天地七代地神五代を以て其奉神とすと雖も、其所謂天地七代地神五代の性體に至りては神道各派が説く所の性徳と大に相異なれり、而して其諸神を奉する所以も亦報本返始の義に非ず、故に天理教を以て神道各派と混するは水火冰炭の相容れざるものを強て混するもの、如し、而して神道が其非なるを知りて猶ほ天理教を其管轄の下に置くものは、蓋し天理教多数の勢力と、金錢の勢力とを利用する腑肺觀るが如きものあり、

第二天理教は何故に一宗を唱ふるの必要あるやの質問を提出するものは天理教が即今神道に附屬するが

故なり、天理教にして神道に異なれば神道に附屬するの理由はあらざるべく、天理教にして神道に同じければ一宗を唱ふるの必要はあらざるべし、若し又天理教にして一宗を唱ふるの必要ありとせば、必ず從來の佛教神道及基督教に満足せざる所あるべし、天理教の果して那の點に於て佛教に反對するか、果して那の點に於て神道に満足せざるか、天理教たるもの一一之を明示せざるべからず、天理教は神道管長稻葉正邦氏の管轄に屬せり、抑も稻葉正邦氏が華族にして而かも敬神の志に篤きに至りては吾輩年素之を耳にす、然れども稻葉氏は果して何如なる理由

ありて天理教を神道管轄に屬することを許可せられたるや、是れには必ず多少の仔細あることあらん、苟も稻葉氏にして神道管長たるの責任を盡さんとするは、此理由を天下に明にせざるべからず、今や稻葉氏自ら其理由を天下に明にせず、吾輩稻葉氏に逼りて其理由を聞かざるべからず、

第八 天理教排撃すべし

吾輩は以上の如く天理教に向て五調査二質問の議を提出せり、此五調査二質問にして既に其要領を得、果して世道人心に害ありと認むるときは、進んで之を排撃するに躊躇せざるべし、蓋し天理教も今日世

人より攻撃を受くるの點は大抵左の如し、

第一天理教の名稱は僭妄なり、天とは天祖の義にあらずや、而して天祖の眞理を自己に獨有すとして敢て天理教の名稱を擅にす、濫なりと謂ふべし、

第二天理教の教祖オミキ婆の姦智に長したる不學無識の女子のみ、而して醜行甚た多し、斯る婦人にして新宗教を唱ふ、畢竟金錢を騙取するの手段たるのみ、

第三教祖オミキ婆の夫は三百代言にして夫妻心を合せ、姦計を以て愚夫愚婦を瞞着したるの

事實顯然たり、

第四天理教の全國到る所、皆姦夫姦婦の巢屈として、其布教手段の色情を以て少年男女を誘惑するにあり、

第五天理教の教師は皆無賴無識の徒にして、金錢を騙取するを以て唯一の目的とす、

第六天理教は何如なる病患者にも唯た一滴の神水を吞まじめ藥を服することを許さず、是れ衛生上の大敵なり、

第七天理教は男女の坐次を混亂し、少年の男女相雜りて踊を爲さしむ、是れ風俗を壞亂する

ものなり、

第八各地方天理教に師信徒の醜行悪事は勝げて言ふべからざるものあり、是れ姦民の淵藪なり、

第九天理教は出離解脱の教義なし、是れ佛教にあらざるなり、

第十天理教は報本返始の義なし、是れ神道にあらざるなり、

第十一天理教は日本國初の天祖を冒瀆し、而して教祖オミキ婆を以て或は之か上に加ふ、是れ大不敵の尤も甚さるものなり、

第十二天理教の太和本部は常に無頼腕力を弄するの徒を雇ふて防護の用に供すと稱す、果して其何を防護するかを知らざるなり、

第十三天理教の説教を聽くに淺陋野卑一も耳を傾くるに足るものなし、縱令他に欽點なしとするも、取るに足らざるなり、

第十四天理教は大い佛教神道の進路を礙く、是れ邪を以て正を壓す、排撃せざるべからざるなり、

第十五天理教は教育上の敕語と相關する所なし、是れ亦國民の教育と衝突する基督教よりも甚

ときものなり、

四十八

第十六天理教は日清戦争の役に若干の義捐金を
献じたるも、是れ自教の勢力を装はんが爲め
に然かしたるものにて、國家を思ふの衷情よ
り然かしたるものにあらざるものなり、

第十七天理教の信徒は唯だ自教の信徒も親睦す
るのみにして一般人民の和合せず、是れ社會
の和合を破るものなり、

第十八天理教の和讃を聴き、其踊を見るときは、
人をして嘔吐を催ふせしむ、是れをも宗教と
言ふべくんば一般宗教の神聖を穢さんとする、

凡そ以上掲録する所は、世人が天理教を排撃するの
口實にして果して此に一あれば世人は力を極めて天
理教を排撃せざるべからず、然れども天理教を排撃
するは、殆ど宗教者の輿論となりて電同附和の議も
必ず多からん、此際世道人心に志しあり、護法愛國
に心あらん人は、宜く事實を調査し着々排撃すべし、
徒らに電同附和し、其利害眞偽を究めずして之を排
撃するは吾輩の取らざる所なり、

第九 天理教を排撃する方法

故に天理教を排撃せるの方法たるや、先づ天理教が
附屬するの神道管長に向て何故に報本返始の大義を

明にせざる天理教を其附屬となしたるやどの質問の大砲を放つべし、是れ天理教攻撃の中堅たり、又天理教に向つて其何故に神道の一派たるや、然らば何故に一宗を唱ふる必要あるかを詰責すべし、是れ天理攻撃軍の後陣なり、五ヶ條の調査を以て天理教の眞偽虚實を探るべし、是れ攻撃軍の斥候なり、天理教に秘密的、預言的、普通的の三大要素あるは是れぞ天理教が勢力を得るの根本なりと知るべし、故に佛教家たらんものは早く此に注意若て内自ら其要素を發達すべし、是れ自ら富強を圖りて内亂外寇

を未發に禁ずるの要道なりと知るべし、是れ攻撃軍の攻法にあらずして守防なり、以上天理教に就て略論する所、之を一言すれば、吾輩は他の天理教排撃論者の如く天理教を絶對的に攻撃するものにあらず、寧ろ天理教を以て世界新宗教の一現象として之を討究せんと欲するものなり、而して天理教にして果して世を益し人を利するの點あらば、吾輩は他宗教を視るか如く亦天理教を視るに躊躇せざるべし、若し天理教にして果して國家を害し眞理に背するあらん乎、吾輩は斷々乎として之を排斥するに猶豫せざるべし、之を要するに天理教に

對する吾輩の立言は公平無私なり、吾輩は真理の討
究者にして一派一宗の辨護者にあらず、唯た夫れ眞
理者の討究者にして一派一宗の辨護者にあらざるか
故に、吾輩の觀察と判斷とは公平無私なり、是れ吾
輩の自ら確信する所なり、

天理教處分論 大尾

明治廿九年九月廿七日印刷
明治廿九年十月一日發行

(定價金拾貳錢)

東京市麻布區宮村町七十八番地

著作兼發行者 池田良吉

東京市京橋區山城町六番地

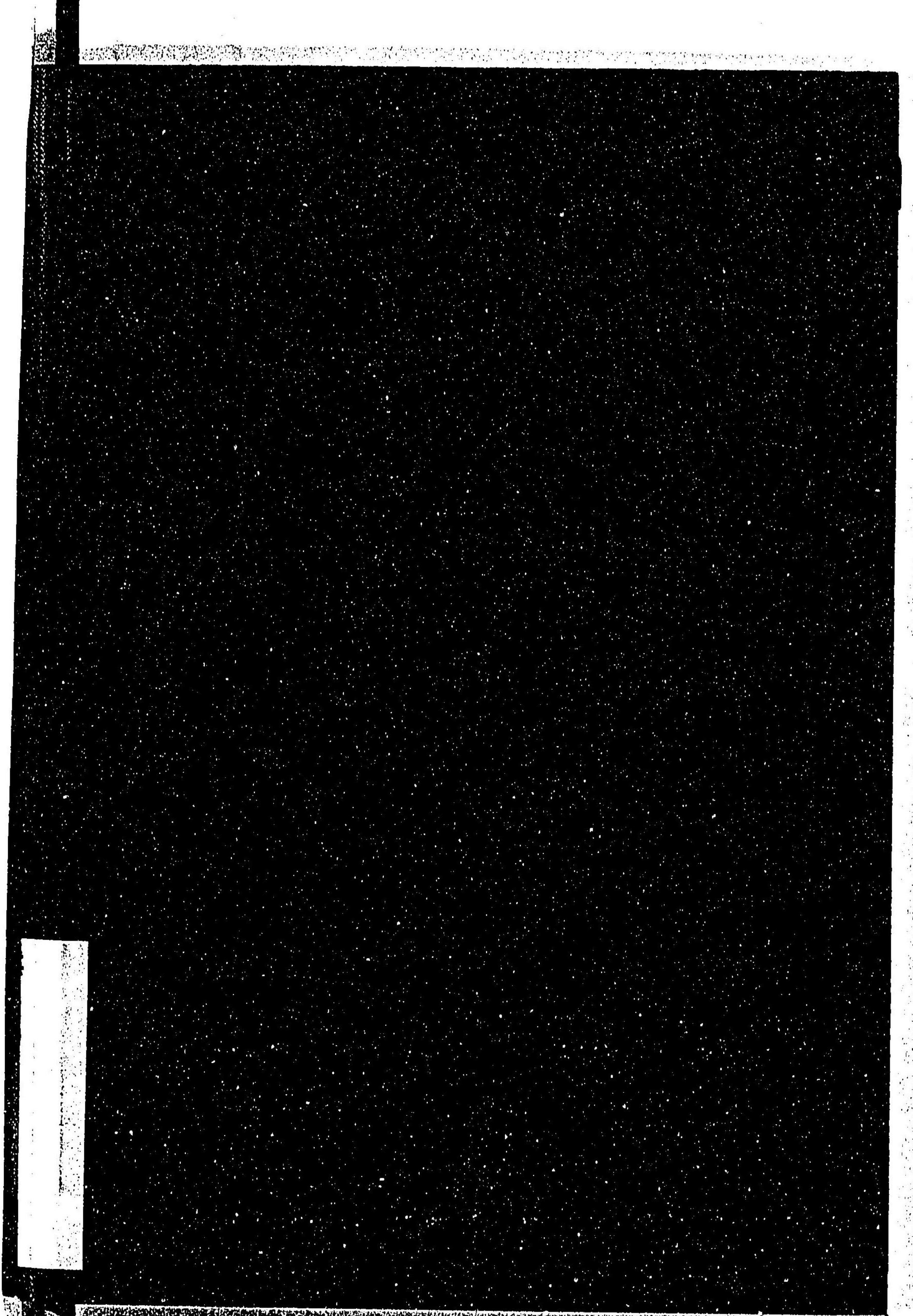
印刷者 田中正造

東京市麻布區宮村町七十八番地

發行所 護法書院

東京市京橋區山城町六番地

印刷所 集英堂印刷所



1

特18
766

天理教処分論
国立国会図書館

014444-000-5

特18-766

天理教処分論

池田 良吉/著

M29

ABB-0822

